次の漢詩（訓読文と書き下し文）と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

登岳陽楼　　杜甫

昔聞ク洞庭ノ水
今上ルル岳陽楼
呉楚東南ニ坼ケ
乾坤日夜ニ浮カブ
親朋無ク一字
老病□リ孤舟ニ一
戎馬関山ノ北
憑リテ軒ニ涕泗流ルル

（書き下し文）岳陽楼に登る
昔聞く洞庭の水
今上る岳陽楼
呉楚東南に坼け
乾坤日夜に浮かぶ
親朋一字無く
［　Y　］
戎馬関山の北
軒に憑りて涕泗流る

（注）洞庭＝洞庭湖。中国の湖南省にある大きな湖。岳陽楼＝洞庭湖の東北のほとりに建つ高い建物。呉楚＝昔の呉と楚の国（湖の東と南にあたる地方）。坼け＝さけて分かれ。乾坤＝天と地。親朋＝親類や友人。一字＝一字の手紙。老病＝年老いて病気がちなこと。孤舟＝ただ一そうの舟。戎馬＝軍馬。戦いのこと。関山＝関所のある山々。軒＝手すり。涕泗＝なみだと鼻水。

【鑑賞文】

杜甫（七一二～七七〇）は、唐の詩人で、律詩を完成させ、「詩聖」とよばれ、李白とならんで「李杜」と称される。杜甫は、晩年、舟で長江を下り、二年ほど湖北・湖南の水の上をさまよう暮らしを送った。この詩は、そのころの作品の一つで、杜甫の晩年の代表作に数えられている。

第一句と第二句で、作者は、昔から話に聞いていた洞庭湖を、今ようやく岳陽楼の上からながめている。「昔」と「今」が対応し、長い年月を経て、ここにたどり着いた思いがこめられている。

第三句と第四句では、目の前の湖がえがかれる。呉と楚の地方は、湖によって東と南に引きさかれるように分かれ、天と地が、昼も夜も湖の上に浮かんでいるように見える。1天地をのみこむほどの、雄大な景色である。

ところが、第五句と第六句で、作者の目は自分自身に向けられる。親類や友人からは、一字の便りもない。年老いて病気がちの自分には、ただ一そうの小さな舟があるだけだ。家もなく、舟で旅を続ける作者の孤独が、ここにはっきりと表れている。大きな景色をよんだ対句と、小さな自分をよんだ対句が並べられることで、作者のさびしさは、いっそう深く感じられる。

最後の二句で、作者は、関所のある山々の北では、今も戦いが続いていることを思う。そして、楼の手すりによりかかり、2涙を流す。自分の身の上の悲しみに、国を思う悲しみが重なっているのである。

このように、律詩の対句は、ただ形をそろえるためだけのものではない。二つの句を並べることで、昔と今、景色と自分とを向かい合わせ、ことばでは言いつくせない思いを、読む人に感じとらせるのである。

（漢詩は杜甫「岳陽楼に登る」　鑑賞文は創心館オリジナル文章）

問一 この詩の形式を、漢字四字で答えなさい。

問二 この詩で押韻している字を、訓読文からすべて抜き出し、句の順に書きなさい。

問三 第三句と第四句は対句になっている。第三句の「呉楚」「東南」に対応する語を、第四句からそれぞれ二字で抜き出しなさい。

呉楚

東南

問四 訓読文の第六句の□には、漢字一字がかくしてある。□に入る漢字一字を、第五句との対句の関係から考えて書きなさい。

問五 鑑賞文の筆者は、第三・四句と第五・六句の二組の対句が、何をよんでいると述べているか。次の文のａ・ｂに入ることばを、鑑賞文からそれぞれ五字で抜き出しなさい。

第三・四句は［ａ］をよみ、第五・六句は［ｂ］をよんでいる。

a

b

問六 書き下し文の「 Y 」に入る第六句を、訓読文の返り点と送り仮名にしたがって、書き下し文に直しなさい。

問七 1天地をのみこむほどの、雄大な景色とあるが、第三句・第四句の説明として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　天と地が湖に浮かんでいるようだと、洞庭湖の広大さを大きくえがいている。

イ　呉と楚の国の間で起こった戦いの激しさを、昼も夜も続く様子でえがいている。

ウ　湖の上に浮かぶ舟から見た、夜の静かな景色をえがいている。

エ　年老いて病気になった作者の、ゆれ動く心をえがいている。

問八 2涙を流すとあるが、作者が涙を流すのはなぜか。鑑賞文をふまえ、「孤独」「戦い」という二つのことばを使って、五十字以上、六十字以内で書きなさい。

解答（答えと短い解き方）

漢文の返り点・書き下し 発展① 漢詩の対句と書き下し

本文の読解

問一 五言律詩

八句から成るので律詩。一句が五字なので五言。合わせて「五言律詩」。

問二 楼・浮・舟・流

五言の詩なので、偶数句（第二・四・六・八句）の終わりの字を見る。

問三 呉楚＝乾坤　東南＝日夜

「呉楚（地方の名）／乾坤（天と地）」「東南（方角）／日夜（時間）」「坼け／浮かぶ」が、同じ位置で対応している。

問四 有

第五・六句は対句。同じ位置の「無」と反対の意味で、送り仮名「リ」に合う字は「有」。

問五 a　大きな景色（「雄大な景色」でもよい）　b　小さな自分

鑑賞文の第四段落「大きな景色をよんだ対句と、小さな自分をよんだ対句が並べられることで」から抜き出す。

問六 老病孤舟有り

「老」「病」はそのまま読み、二点の「有」は後回しにして、一点の「舟」まで読んでから返る。

問七 ア

鑑賞文の第三段落に「天と地が、昼も夜も湖の上に浮かんでいるように見える」とある。

問八 （例）親類や友人からの便りもなく、年老いて舟で旅を続ける孤独の悲しみに、北で今も戦いが続く国を思う悲しみが重なったから。

便りもなく年老いた孤独（第五・六句）に、戦いが続く国を思う悲しみ（第七句）が重なっている。